隋時代の道教像に関する一考察
—愛知県美術館木村定三コレクション・石造道教三尊像を中心に—

齋藤龍一（大阪市立美術館）

はじめに

近世・近代絵画あるいは陶磁器の優れた作品群を有することで知られる愛知県美術館所蔵の木村定三コレクションには、南北朝時代北魏（6世紀前半）の石造如来三尊龕をはじめとする数点の中国彫刻が含まれている。拙稿で取り上げる石造道教三尊像もそうした作品の一つである。

さて2009－2010年、東京・三井記念美術館、大阪市立美術館、長崎歴史文化博物館の3会場において、「道教の美術」展が開催された。これは「道教」をテーマとして作品を集め、これまでとやや異なる視点から中国・日本の美術を捉えようと試みた企画であり、出品総数は約420件にのぼった。本展では木村定三コレクション・石造道教三尊像をはじめ国内に所蔵される道教像も多数ご出品いただいたが、これが縁となり本像に関した小考を発表する機会を与えられた次第である。

1．南北朝〜隋・唐時代の道教像をめぐって

そもそも道教においては礼拝の対象としての偶像を必要としていなかったが、中国各地で隆盛する仏教の影響を受け、遅くとも南北朝時代（5〜6世紀）に道教像が出現したと考えられ、現存する最古の道教像は南北朝時代北魏（5世紀後半）の作例である。必然的に道教像の形式は、同時期の仏教像を模倣することに端を発しており、初期の作例では仏教像であるか道教像であるか判断のつきにくい場合もある［注1］。その後、西魏（6世紀中頃）には冠・凭几・麈尾といった重要アイテムが揃い、道教像における定型化をみている［注2］。

さて南北朝〜隋・唐時代における道教像の主尊は、老子を神格化させた「老君」あるいは最高神である「天尊」といった尊名が多いことが銘文から明らかになっている。しかしながら図像上は両者に明確な区別がなされていかったようであり、基本的な造形としては漢民族の威厳ある男性のすがたがベースとなっていると思われる。

この点は、西方よりもたらされた外来宗教でもあり時代的様式変遷が比較的わかりやすい仏教の造像と大きく異なり、道教像は漢民族の威厳ある男性のすがたのイメージにあまり変化が生じなかったためか、時代的様式変遷を追いにくいと指摘することができる。そのため紀年銘を有さない道教像については仏教像に比べて情報量が少なく、制作年代を推定する手がかりが見出しにくいといえる。また隋・唐時代も道教は仏教と共に篤い信仰をあつめていたが、今日まで現存する道教像は仏教像に比べ圧倒的に少数である。こうした要因から道教美術に関する研究は、近年に神塚淑子、李松両氏を中心とする優れた論考が発表され続けているものの、解決すべき問題が山積している。

2．木村定三コレクション・
石造道教三尊像の制作年代について

さて木村定三コレクション・石造道教三尊像(以下、愛知県美像と称する)は総高21.0㎝の小型造像で、紀年銘などは刻まれていない。

本像は、制作された年代や地域を明確に示すような特徴がみられない作品であり、「道教の美術」展に際してはその作風から隋時代と表記したが、何らかの裏付けがあったわけではない。またこれまでのところ類似作品も発見されていないため、拙稿では愛知県美像にみられる造像的特徴を確認し、南北朝〜隋・唐時代全般に視野を広げ、共通点を有する作例を示しながら制作年代について検討を試みたい［注３］。

基本的な構成としては、大きな舟形光背(頂部は欠失)に、坐像を主尊とし二立像を左右脇侍とする三尊が彫出される［図１・２・３・４］。主尊は八角形台座に坐し、冠を戴き大きなマント状の衣を羽織っており、膝前には凭几が置かれ左手でこれをにぎる(右手は欠失)。この凭几とは、天板がU字形に湾曲し体をもたれさせるための三脚の座具であり、実際には男性が威儀をただす際に用いるアイテムであった。そして主尊頭部の後方には蓮弁形頭光が浮彫され、台座脇には一対の獅子が表されている。左右両脇侍は蓮弁上に直立し、共に冠を戴き両手で笏を執っている。この脇侍を側面からみると、衣の袖を表す線刻がやや不自然な形状になっており、本像の制作にあたった石工の癖といえるかもしれない。なお背面を含め、銘文はみられない。

以下、類似点が見出される作例を示していくこととする。

［正面］

［左側面］

［右側面］

［背面］

図1・2・3・4　道教三尊像（愛知県美術館・木村定三コレクション）

◆全般的な類似

さて愛知県美像といくつかの特徴が一致する作品に唐・貞観十六年(642)道教三尊像(ワシントン・フリーアギャラリー)、総高21.2㎝がある［注4／図5］。その特徴として、主尊のやや開くような口元や上半身が縦長の長方形を呈した体型、そして羽織ったマント状の大衣に皺などの衣文線を彫出しない点、脇侍の頭部が舟形光背の弧線に沿うかのように、やや内側に傾く点を挙げることができる。さらに、多くの道教三尊像にも表される凭几や一対の獅子といった特徴を含めればトータルとし

図5　唐・貞観十六年（642）道教三尊像（ワシントン・フリーアギャラリー）

図6　北周・建徳三年（574）如来三尊像（京都大学文学部）

図7　北周・天和三年（568）道教［老君］三尊像（東京藝術大学大学美術館）

図8　隋・開皇七年（587）道教三尊像（ボストン美術館）

て最も愛知県美像に近い作品といえよう。しかし一方で、基檀部の形状はもとより、主尊の顎ひげの形態や脇侍における笏の有無など相違点も少なからず見出される。

また道教像ではないが類似する特徴がみられる仏教像として、北周・建徳三年(574)如来三尊像(京都大学文学部)、総高25.5㎝がある［図6］。基壇上に如来坐像を主尊とする三尊と一対の獅子(脚部のみ現存)が彫出されている。愛知県美像と比べると、主尊の蓮弁形頭光や八角形台座、そして脇侍立像が舟形光背の弧線に沿って内側に傾く点などが似通っているといえよう。

図9　唐・景雲二年（711）道教三尊像［部分］（山西・芮城県博物館）

図10　隋・開皇十九年（599）道教四面像［側面龕］（陝西・薬王山碑林博物館）

◆部分的な類似

◇蓮弁形頭光

先に示した蓮弁形頭光は仏教像にあっては珍しい図像ではないが、道教像においてもその影響を受けて模倣されたのであろう。これは北周・天和三年(568)道教［老君］三尊像(東京藝術大学大学美術館)［図7］や、隋・開皇七年(587)道教三尊像(ボストン美術館)［図8］をはじめとして北周～隋時代の道教像に散見される特徴であるが、唐時代になるとかなり減少したようである。

◇頭部が卵形を呈し髪際線がない

愛知県美像の主尊・脇侍の頭部はつるんとした前頭部が特徴的であり、髪の生え際が刻出されず、頂部に小ぶりな冠を戴いている。こうした点は、唐・麟徳二年(665)道教三尊像(ボストン美術館)、唐・長安三年(703)道教三尊像(ワシントン・フリーアギャラリー)や唐・景雲二年(711)道教三尊像(山西・芮城県博物館)［図9］をはじめとして、もっぱら唐時代の作例を中心に見出される特徴である。

◇主尊の顎ひげ

図11　唐・開元七年（719）道教［常陽天尊］坐像［部分］（山西省芸術博物館）

図12　北周・如来三尊像（東京・永青文庫）

愛知県美像の主尊面部でやや違和感のある造形といえるのが、まるで取って付けたかのような顎ひげである。通例では顎の輪郭線は浅彫りにし、顎ひげが生える様子をより自然に表現しているが、本像では顎の輪郭線を明確にし、さらに一段下がって先端が三つある大きな顎ひげが彫出されている。こうした特徴的な顎ひげはほとんど類例がないものである。

また多くの道教像主尊で顎ひげの形態はＶ字形を呈しているが、愛知県美像と同様の先端が三つある顎ひげ表現もみることができる。具体的には北斉・天統元年(565)道教像(河南・偃師商城博物館)、隋・開皇七年道教三尊像(ボストン美術館)、隋・開皇十九年(599)道教四面像(薬王山碑林博物館)側面龕［図10］、唐・長安三年・道教三尊像(ワシントン・フリーアギャラリー)、そして唐・開元七年(719)道教［常陽天尊］坐像(山西省芸術博物館)［図11］などがある。このうち隋・開皇七年道教三尊像［図８］をみると、顎ひげと左右の頬ひげをそれぞれ別々に彫出し結果的に三つのＶ字形からなる髭を形成していることから、愛知県美像の顎ひげはこれの省略形といえるようである。

◇両脇侍が笏を執る

道教像においても脇侍像が彫出されており、その役割は明確ではないが、仏教の主尊・如来像と脇侍・菩薩像/弟子像からなる三尊像に倣ったことにより生み出されたのであろう。唐時代の法琳『辨正論』では、陶弘景の道教像礼拝に関する記述のなかで「仏教に学び尊像を造り、天尊と左右の真人からなる三尊を道堂に安置した。」とあり、「真人」と称すべきなのかもしれない［注5］。

さて愛知県美像と同様に両脇侍が笏を執る作例は、先に示した北周・天和三年道教［老君］三尊像［図7］、隋・開皇七年道教三尊像［図8］をはじめとし、ひろく北周〜隋時代に見出される。その一方、唐時代の作例では両脇侍が合掌することが多く、また片方が笏を執りもう片方が合掌することも少なくない。もちろん両脇侍が笏を執る例は唐・天寶十三年(754)道教三尊龕(ボストン美術館)にみられるように皆無ではないが、唐時代には総じて減少傾向にあったといえるだろう。

◇基壇部の形状

道教像・仏教像を問わず小型像において、基壇部は石材が立方体に成形され、重心が下がり安定する構成となっているのが一般的である。しかし愛知県美像の基壇部は三尊像のある上部よりも小さく成形されていることから、自立はするもののやや不安定な形状といえるだろう。現在は木製の台座に填め込まれた状態で展示されている。

愛知県美像は例外的であるが同様の作例は皆無ではなく、その一例としては北周・如来三尊像(東京・永青文庫)がある［図12］。本像は早崎稉吉が陝西・西安よりもたらした作例の一つで大村西崖『支那美術史彫塑篇』にも掲載されている［注6］。総高40.5㎝、基壇部は宣字形を呈しているがその下半部がなく

やや不安定な形状となっており、底部には大きな枘孔が作られている。これら両像とも後世に改変されたとは考えづらいことから、その理由ははっきりとしないが造立当初からベースとなる別材に填め込まれていたものと考えられるだろう。

以上、愛知県美像の特徴について、それぞれ類似作例をあげながら整理した。このように本像は南北朝～唐時代に流行した様々な特徴が見出され、制作年代を比定する根拠に欠けている。さらに唐・貞観十六年道教三尊像との共通点が多く、愛知県美像の年代を唐時代まで下げて考える必要性も否定できない。しかし先行する南北朝時代の特徴と後に続く唐時代の特徴が並存することから、現時点ではその端境期ともいうべき隋時代の作例とするのが穏当といえるだろう。

次に愛知県美像の制作地域を推定するため、現存する隋時代における道教像の地域性について考察したい。

3．隋時代における道教像の地域性について

さて隋時代の道教像については、神塚淑子「隋代の道教造像」において拓本のみが知られる作例等を含め47例が示されている［注7］。このほか隋時代の道教像に関する専論としては李松「関中及北方的隋代道教造像」があり、陝西を中心に現存する10例があげられている［注8］。

これらの造像形式は、愛知県美像をはじめとする丸彫したいわゆる単独像、石材を縦長の方形に成形しその四側面に尊像を彫出する四面像、岩壁に彫った磨崖像の三つに分類できる。ここでは愛知県美像と関わる四面像と単独像について、それぞれ制作地域ごとに例示しながらその特徴を示したい。［注9］

A　陝西・西安とその近郊

①　四面像

石材の四側面に尊像を彫出する四面像は現在も原所在地周辺に収蔵されていることが多く、地域性を捉えることが比較的容易である。

こうした四面像のうち陝西・西安とその近郊では、全体がやや台形を呈し頂部が平坦あるいは別材の屋根を載せるための枘を有する形態の作例が数多く報告されている。その制作年代は北魏から100年以上にわたっており、仏教像・道教像のみならず仏道混交像もある点が大きな特徴となっている。これらの大部分は陝西の西安碑林博物館や西安北郊の耀県に所在する薬王山碑林博物館、同じく西安東郊の臨潼区博物館などに収蔵されている。

たとえば臨潼・櫟陽鎮に所在していた甲辰銘四面像(臨潼区博物館)は、その干支から制作年が開皇四年(584)とみなされている作例である［注10］。総高164.0㎝のいわゆる仏教・道教混交像で、片面に仏教像、もう片面に道教像が表されている。このうち道教龕をみると、主尊坐像は髭をたくわえるが顔つきは若々しく、右手で麈尾をかかげている。その左右に、両手で小さな笏を執る脇侍像が直立している［図13］。

また耀県・漆河から出土した開皇十九年(599)道教［老君］四面像(薬王山碑林博物館)は、総高75.0㎝の四面像としてはやや小ぶりな作品である。正面龕内には三尊像が彫出されており、主尊坐像はやはり右手で麈尾をかかげ、その左右で脇侍像が直立する［図14］。

このほか陝西に分布する隋時代の四面像は、基本的に北周の様式を踏襲しており、紀年銘がなければ北周か隋か年代を判別しにくい作例も多い。なお龕内の道教三尊像にみられる特徴と

図13　隋・甲辰銘四面像［道教龕］
（陝西・臨潼区博物館）

図14　隋・開皇十九年（599）道教［老君］四面像（陝西・薬王山碑林博物館）

しては、主尊の膝前に凭几を伴わない作例が多みられることがあげられる。凭几は西魏（6世紀中頃）以降の道教像における重要なアトリビュートであるが、必ずしもすべての作例にみられるわけではないようである。

②単独像

おもに単独像には主尊のみが彫出された独尊像と、三尊像の二種類がある。この地域では、三尊像よりもむしろ独尊像が数多く現存している。

◇独尊像

開皇三年(583)道教［老君］坐像(陝西・三原県博物館)は、総高90.0㎝の堂々とした作例である。目を伏せ瞑想するような表情を浮かべ、顎ひげを生やすものの張りのある若々しい顔つきが特徴的である［図15］。首には如来像のような三道が刻まれ、左手は膝に置き、右手を曲げて麈尾をかかげている。

また陝西・彬県出土の開皇三年道教坐像(西安碑林博物館)は、ずんぐりとした体格でまるい顔が特徴的な作例であり、そのすがたは北周の仏教像・道教像に通じるものといえよう［図16］。先の開皇三年道教［老君］坐像(陝西・三原県博物館)と

図15 隋・開皇三年（583）道教［老君］坐像（陝西・三原県博物館）

図16 隋・開皇三年（583）道教坐像（西安碑林博物館）

同様に若々しい顔つきであって、且つ右手は麈尾をかかげるポーズをとっている。

このほか開皇二年(582)道教龕(西安碑林博物館)、開皇五年(585)道教［老君］坐像(西安碑林博物館)なども同様の作例であり［注11］、若々しい面貌と麈尾をかかげるポーズが特徴となる主尊が、隋時代の陝西・西安とその近郊で流行していたようである。

◇三尊像

耀県・漆河で発見された開皇六年(586)道教［天尊］三尊像(薬王山碑林博物館)［図17］は総高62.0cmの作例で、現状では主尊の頭部や光背の上部などを欠失する。主尊は首に三道が刻まれ、右手を膝の上に置き麈尾を執っており、凭几は表されていない。両脇侍像は直立しいずれも首に三道があり、両手で胸前に笏を執っている。

以上が陝西・西安とその近郊の単独像であるが、これらはいずれも凭几が表されていない。もちろん西安市南郊出土の開皇二年道教坐像(西安市文物保護考古所)のように凭几を伴う作品も皆無ではないが、比較的少数にとどまっている［注12］。

図17　隋・開皇六年（586）道教［天尊］三尊像（薬王山碑林博物館）

図18　隋・開皇八年（588）道教［老君］四面像（山西・芮城県博物館）

B　山西・西南部

山西・西南部である運城地区は、黄河を臨み陝西・西安と河南・洛陽の中間に位置し、元時代の道観である芮城・永楽宮が現存することでも知られる、道教美術研究において重要な地域の一つである。

①四面像

この地域から出土・伝来した西魏～隋時代の道教四面像は、いずれも正・背面の幅が広く側面の薄い碑のような形状であり、陝西の四面像とは形状が異なっている。

このうち隋時代の作品としては、開皇八年(588)道教［老君］四面像(芮城県博物館)がある［図18］。頂部が三角形を呈し総高が160.5cmの大型像で、多くの供養者像や長文の銘文が刻まれる点でも重要な作例として知られる［注13］。ここでは龕内の尊像についてのみ言及するが、正面及び背面の大龕にはそれぞれ三尊像が彫出されている。主尊は台座上に坐し、左手で凭几をにぎり、右手はその上に置いて麈尾を執っている。その左右に脇侍立像と一対の獅子が表されるが、龕内が比較的広いにもかかわらず五尊あるいは七尊ではなく三尊のみのため、やや

空白があるのが興味深い。この点は、同地域から出土したと考えられる北周・建徳元年(572)道教［元始天尊］四面像(ワシントン・フリーアギャラリー)と異なっている。

②単独像

この地域は仏教像を含め、いまだ造像の調査研究がすすんでおらず不明な点が多い。

◇ 独尊像

同地域から出土あるいは報告された独尊像はほとんどなく、その数少ない例として運城・柏口窯から出土した北斉～隋時代の道教［天尊］坐像(運城河東博物館)がある。報告書によれば主尊の頭部などを欠失しており現状の総高は23.5cm、膝前に凭几が表され、左右には一対の獅子が彫出された作例とされるが、画像は公表されておらず詳細は不明である［注14］。

◇ 三尊像

開皇七年道教三尊像(ボストン美術館)［図８］は総高24.0cm、先述したように愛知県美像とも共通点がある点でも重要である。両手及び凭几を欠失するが(凭几の脚先のみ現存)、隋時代の紀年銘を有する道教三尊像としては整ったすがたの作例である。清・光緒二十七年(1901)に刊行された胡聘之撰『山右石刻叢編』巻三に「蘇遵造像記」として本像と同一の銘文が掲載されていることから、山右＝山西に所在していたことが確認できる［注15］。さらに原所在地について推論するならば、北周及び隋・唐時代に多くの道教三尊像がつくられた山西・西南部であった可能性が高いだろう。

これらの作例で同地域の独尊像・三尊像について論じることは困難であるが、おそらく基本的には四面像と同様に凭几を表すことが一般的であったのだろう。

図19　西魏・大統十四年（548）道教［太上老君］碑像［部分］（芮城・永楽宮）

以上、陝西・西安とその近郊、及び山西・西南部の二地域に分布する隋時代の道教像について、造像形式ごとに概観した。このうち陝西・西安とその近郊では四面像・単独像を問わず、凭几が彫出されない傾向があると指摘できる。また同地域の主尊像は若々しい面相であり、本来は仏教の如来にみられる八十種好のひとつ三道が首に刻まれるなど、山西・西南部とは異なった造形意識があったようである。

さて、これまでに判明しているなかで道教像に凭几が表される最初の作例は、山西・西南部の芮城から出土した西魏・大統十四年(548)道教［太上老君］碑像(芮城・永楽宮)である［図19]。おそらくこうした凭几を伴う道教像の伝統が山西・西南部に根付き、それが隋時代の造像にも影響を与えたと考えられる。一方、陝西・西安とその近郊では既に北魏(５世紀末)から凭几を表さない道教像の伝統があった。もちろん同地域の北周～隋時代の作品にも凭几を伴う道教像はみられるが、その数は凭几のないものに比べきわめて少数である。このことから陝西・西安とその近郊では、凭几を表す道教像の図像は伝わって

いたものの、以前からの道教像の伝統に重きを置き、あえて凭几を採用することを避ける傾向があったと推測される。

隋時代の道教像には、こうした南北朝時代の地域性がいまだ影響をみせているといえるだろう。最後に、このような出土・伝来の判明する作例が少ない状況での推測ではあるが、愛知県美像の原所在地については、山西・西南部である可能性が高いことを指摘しておきたい。

4. おわりに

以上、愛知県美像の制作年代南北朝〜唐時代にわたる様々な作例との比較により検討し、制作地域については陝西・西安とその近郊、及び山西・西南部に分布する作例の考察を通じて一応の推論を示した。

最後になるが、道教像をはじめとした中国美術全般に関する欧米・日本への将来について概況を示し、拙稿の結びにかえたい。

近代の欧米における中国古美術収集は、主に19世紀末における万国博覧会の開催や中国への探検隊派遣にはじまるといえよう。探検隊の「成果」により、新疆の沙漠に埋もれた古代遺跡が発見され、あるいは甘粛・敦煌莫高窟を世界的に知らしめることとなった。清時代末という混沌とした政治状況の中、中国各地で、宮中にあった書画をはじめ様々な道教像・仏教像や考古遺物が売買されていった。

後に日米多数の美術館に収蔵される作品群を入手したことで知られる早崎稉吉が、明治四十三年(1910)/清・宣統二年に岡倉覚三［天心］に宛てた書簡によると、既に当時の陝西・西安には15軒の古美術商があったという。また「米人羅弗氏」が

「何等の鑒識を有セず唯金力ニより玉石混交軒並ニ舗子品物全部を一纏めニ買占むる」ため、「市価ハ愈々暴騰して停まる所を不知有様」となり、４軒の古美術商が空き家同然になったと伝えている［注16］。ここにある羅弗氏とは、シカゴ・フィールド自然史博物館に大量の中国資料をもたらしたベルトルド・ラウファーのことであろう［注17］。

道教像・仏教像に関しては、持ち運び便利な小型像はもちろんのこと石窟に彫出された大型像までもが将来されている。このことは世界各地で中国美術に触れることができる一方、将来された造像の大部分が出土地・原所在地不詳なため、制作地域を特定するのが容易ではないという研究上の問題も生じさせている。

なかでも隋時代の道教像については大部分の小型単独像が、早崎－岡倉、そしてラウファーという二つのルートによって収集されたようである。結果的にこれらはワシントン・フリーアギャラリー、ボストン美術館、シカゴ・フィールド自然史博物館といったアメリカの美術館・博物館に収蔵され現在に至っている。今後は現地中国のみならずアメリ所蔵館での調査を踏まえ、愛知県美像をはじめとする日本所在の作例についてより詳細な造像研究をすすめると共に、こうした道教像・仏教像をめぐる近代史についても明らかにしていきたい。

註

［１］北魏(５世紀前半に)に陝西・西安を中心として流行をみた、着衣などに平行多線文が刻まれた一連の造像については、拙稿「中国南北朝時代の「富県様式」仏教・道教造像に関する再検討」（曾布川寛編『京都大学人文科学研究所研究報告 中国美術の図像学』2006年)をご参照いただきたい。

［２］道教像の基本的な特徴とアトリビュートについては次の拙稿をご参照いただきたい。

「道教像の出現とその展開」齋藤龍一編『道教の美術』展覧会図録、読売新聞大阪本社・大阪市立美術館、2009年。
「道教像のすがたとひろがり 南北朝〜唐時代」齋藤龍一・鈴木健郎・土屋昌明共編『アジア遊学』第133号、2010年。

［3］なお拙稿で取り上げる作例はいずれも石造彫刻であり、その名称については銘文により主尊の尊格が明らかな場合これを付記した。

［4］このほかフリーアギャラリー所蔵作品のデータについては、ホームページwww.asia.si.eduのコレクション・データベースを参照した。

［5］前掲、「道教像のすがたとひろがり 南北朝〜唐時代」、84頁。

［6］大村西崖『支那美術史彫塑篇』仏書刊行会図像部、1915年、第583図。
本像について同書では、「長安草堂寺旧蔵」そして「早崎君蔵」とする。大村西崖(1868-1927)は「彫塑」という言葉を生み出したことでも知られる。本書は、これまで金石学の対象として扱われてきた彫刻作品について、制作年代ごとに仏像・道教像・その他の像に分類し、銘文のみならず造像の形式及び様式についても論じた、初の中国彫刻研究書である。

［7］神塚淑子「隋代の道教造像」『名古屋大学文学部研究論集 哲学』52、2006年。

［8］李松「関中及北方的隋代道教造像」『彫塑』2009年第3期。

［9］仏教石窟が南方を除く中国各地で造営されたのに対し、道教石窟はごく少数である。そのなかで四川では道教像が彫出された石窟・磨崖が各地に現存しており、特に唐〜宋時代の道教像を研究するにあたり重要な地域である。また隋時代の道教像も綿陽・玉女泉摩崖などで確認されている。四川の道教像はむろん陝西・山西・河南などの造像と関連性があるものの独自の展開をみせており、これについては稿を改めて検討したい。

［10］前掲、李松「関中及北方的隋代道教造像」。

［11］裴建平・李雪芳「碑林蔵仏道合刻造像及道教造像」『碑林集刊』３、1995年。

［12］翟春玲「西安市出土的一批隋代仏道造像」『文物』2002年第２期。

［13］本像については前掲、神塚淑子「隋代の道教造像」において詳細に論じられている。

［14］運城地区河東博物館「山西運城柏口窯出土仏道造像碑」『考古』1991年第12期。
同報告書ではこのほか隋・大業銘(605-18)道教［天尊］坐像(運城河東博物館)も掲載されるが、画像がきわめて不鮮明で

詳細は不明である。なお本像も主尊の膝前に凭几が表されている。

[15]『山右石刻叢編』山西人民出版社、1988年。
この影印本では、本来は所在地が記される「今在」以下の箇所が黒く塗りつぶされている。同書が刊行される1901年以前に、その所在が不明になったのであろうか。後にボストン美術館の所蔵となるのは岡倉覚三より購入した1906年である。なお本像について李松氏は前掲「美国収蔵的中国早期道教雕塑」において、理由は明示しないものの山西から将来された作品と推定している。このほかボストン美術館所蔵作品のデータについては、ホームページwww.mfa.orgのコレクション・データベースを参照した。

[16]『岡倉天心全集 別巻』平凡社、1980年、220頁。
早崎稉吉(1874-1956)は岡倉覚三［天心］の命を受け、陝西・西安を中心に作品収集にあたった。本書簡は当時、早崎の拠点であった道観・八仙宮から差出されたもの。早崎については下記の論考を参照されたい。
白川一郎「竜門石仏を発見した一日本人」『芸術新潮』第10巻第7号、1959年。
ヤン・フォンテーン「岡倉覚三、早崎稉吉と白馬寺の石造菩薩」『佛教藝術』第90号、1973年。
前掲・『岡倉天心全集』全9巻、平凡社、1979-1981年。
毛利伊知郎「早崎稉吉-中国美術の紹介者- シリーズ・三重の作家たち」『ひる・ういんど』第11号web版、三重県立美術館、1985年。
毛利伊知郎「早崎稉吉-中国美術の紹介者-承前 シリーズ・三重の作家たち」『ひる・ういんど』第12号web版、三重県立美術館、1986年。
「第一回「岡倉天心先生を語る」座談会」(昭和18年(1943)10月、早崎稉吉をゲストに開催された座談会の速記録。)『五浦論叢』第7号、2000年。

[17] 早崎の書簡により、人類学者・ラウファー(Berthold Laufer/1874-1934)の豪快な収集の様相を垣間見ることができる。早崎はその手法を批判するが、そもそもラウファーは美術史家ではなく、中国美術・骨董に対するアプローチがまったく異なっていたのだろう。

図版出典

［1・2・3・4］愛知県美術館提供。

［5］フリーアギャラリー・ホームページ
www.asia.si.edu/collections/singleObject.cfm?ObjectNumber=F1909.84

［6］松原三郎『中国仏教彫刻史論』吉川弘文館、1995年、図366b。

［7］齋藤龍一編『道教の美術』展覧会図録、読売新聞大阪本社・大阪市立美

術館、2009年、図072。

[8] Stephen Little, *Taoism and the arts of china*, Arts Institute of Chicago,2000,No.32.

[9] 齋藤龍一編『大唐王朝女性の美』展覧会図録、中日新聞社、2004年、図90。

[10] 胡文和『中国道教石刻芸術史』高等教育出版社、2004年、図46-1。

[11・13・15・19] 筆者撮影。

[12] 前掲、松原三郎『中国仏教彫刻史論』図366a。

[14] 李松『長安芸術与宗教文明』中華書局、2002年、図J51。

[16] 前掲、松原三郎『中国仏教彫刻史論』図862。

[17] 前掲、胡文和『中国道教石刻芸術史』図42。

[18] 張俊良「芮城北周隋唐仏道造像」『文物世界』2005年第6期、図2。

石造道教三尊像　中国・隋時代